

中国チベット族・ウイグル族のインターネット  
利用とアイデンティティ形成  
—北京市チベット族・ウイグル族を事例として(2013)  
A Study on the Relationship between the Identity of Tibetan and  
Uyghur in China and their Internet Use:  
A Case Study of Tibetan and Uyghur in Beijing (2013)

金 雪<sup>1</sup>

Seol KIM

<sup>1</sup>慶應義塾大学大学院法学研究科 Graduate School of Law and Politics, Keio University

**要旨**…本稿の目的は、「中国少数民族のアイデンティティ再形成におけるメディアの役割に関する調研究」の一環として、チベット族とウイグル族のメディア利用に着目し、異なる宗教を信仰する彼(女)らのインターネット利用とアイデンティティとの関係を明らかにすることである。インターネット利用とアイデンティティの関係を明らかにするために、2011年2月から2013年8月までを調査期間とし、北京に在住するチベット族、またはウイグル族の身分証を有している、チベット族8名と中央民族大学のウイグル族在学生8名を対象に、インタビュー調査を行った。この調査を通じて、中国人意識と民族意識のどちらが強いかを考察し、彼らのインターネット利用とアイデンティティとの関係を明らかにする。

**キーワード** チベット族、ウイグル族、宗教、アイデンティティ、インターネット

## 1. はじめに

本稿の目的は、「中国国境地域の少数民族におけるアイデンティティ形成とメディアの役割に関する調査研究」の一環として、独自のアイデンティティを抱く中国チベット族とウイグル族に着目し、北京在住のチベット族、ウイグル族の宗教・民族意識とインターネットの利用との関係を明らかにすることである。イスラム教を信仰するウイグル族と伝統的仏教を信仰するチベット族は、言語、文化、歴史観などの面で高い独立性を保持している。その一方で、中国では1949年の建国当初より、多民族を統合するために中国人としてのアイデンティティ形成が必要となり、「中華民族の多元一体構造」という民族政策を通して、愛国主義や中華民族論が強調されてきた(費1999)。しかし、1970年代後半に改革開放時代を迎え、脱社会主義化が進むと、国境地域の少数民族問題が表面化するようになった。少数民族に関する主要な問題としては、中国政府の少数民族に対する中国語能力の義務付け、少数民族自治区への漢民族の流入、信教の自由の制限などが挙げられる。

一方、近年のチベット民族自治区・ウイグル民族自治区で発生した諸事件の要因として、インターネットを中

心としたニューメディアによる情報環境の変化が指摘できる。2008年、チベット民族蜂起49周年の3月にラサでチベット族の暴動事件が発生した。また、2010年に、青海省のチベット族学生と北京民族大学の学生数千名が政府の民族教育政策に抵抗し、民族語を教育の主たる言語にしようとする民族運動を展開した。2009年には広東省のおもちゃ工場、ウイグル族グループと漢族グループとの間に大きなトラブルが発生した。これらの事件は、海外の民族運動家によるインターネット上の支援活動や世論形成により、その規模が一層大きくなった。

中国政府はウイグル自治区で発生してきた諸事件の背後に、海外のチベットの民族組織と「世界ウイグル会議」があるとし、これら組織が「テロ組織と関連があり、中国分裂を狙っている組織だ」と批判している。リルカーは、「特定の少数グループの意見が無視されることにより、多くの人々の関心を集めるために、またグループの利益のためにネット上の世論形成によってデモなど行う」（リルカー 2006:5）と述べたが、チベット族・ウイグル族自治区でのデモもネット上の世論形成と連動しながら行われたのである。

周知のとおり、中国では、新聞や地上波テレビ(伝統メディア)の報道が政府により制限されるとともに、人々の言論の自由も制限されている。少数民族運動家や社会的少数者らの意見は、伝統メディアから無視され続けている。しかし、彼らはこうした政府の権力に逆らうことは自らの生活を破壊される恐れがあると避けていたが、ネットにおいて初めてこういう恐怖や制限からの逃れられる空間を発見したのである(胡 2008参照)。つまり、インターネット(新興メディア)は、政府による規制があったとしても、伝統メディアよりも比較的自由度が高く、政治や社会問題について情報を発信し、意見を交換することができる世論形成の場として機能するようになった。こうしたインターネットの機能については、「国民国家の枠組みの中で排除されてきた少数者によるアイデンティティの表明や政治参加の可能性を確保することにも通じるのである」(山腰 2012: 38)と評されている。

これまで中国の少数民族の研究は、国家の方針が国民にどのように行きわたるかという問題を中心に据えてきた(国分 2011, 王 2011, 陳 2011, 張 2011)。そのため、少数民族社会や日常生活を中心とした研究は少ない。さらに、オーディエンス研究を見ると、多数派の「漢族」を取り上げる場合がほとんどであり、少数民族とメディアに関する考察はあまり行われてこなかった。

そこで以下では、北京在住のチベット族、ウイグル族の民族意識、信教の活動、インターネットの利用の関連に関して分析を行う。

## 2. チベット族・ウイグル族概況

新疆ウイグル自治区は中国の最西部に位置しており、東部から南部にかけて、それぞれ甘粛省、青海省、西藏自治区と省界を接し、総面積は166平方キロメートルである。中国2010年第六次全国人口センサス<sup>1</sup>によると、自治区の総人口2181万人中ウイグル族は923万人(49.9%)、漢族は874万人(40.1%)、その多民族が384万人(14.0%)を占める。

また、ウイグル自治区はインド、パキスタン、カザフスタン、ロシア連邦、外モンゴルなど8カ国と国境を接している。イスラム教を信仰しているウイグル族にとって、中国の宗教に対する否定的な政策にもかかわらず、イスラム教が日常生活の指針であり、彼らの精神世界の軸を構成している。日々のモスク(イスラム教寺院)への礼拝が励行され、ウイグル族若者57%が毎日1~5回礼拝を行っている(任 2010:33)。

一方、チベット自治区は北西部で新疆ウイグル自治区、北東部は青海省、東は四川省、東南部で雲南省と接し、南はミャンマー、インド、ブータン、ネパールと国境を接し、総面積は122平方キロメートルである。チベット自治区の人口構成は、2010年現時点で、チベット族は272万人(98.5%)、漢族は24万人(8.2%)、その他の民族は4万人(1.4%)の順となる。

ブータンは中国と国境を接している国の中で唯一国交のない国である。しかしチベット族は、ブータンの人口(2010年現時点で695,822人)の50%を占めるチベット人と同一民族意識を持ち、チベット仏教(藏传佛教)を国教とするブータンに愛着を抱いている。チベット自治区では衛星アンテナを設置すれば、海外の衛星放送を視聴できるという。それに対して中国政府は、焼身自殺などの抗議事件の世論を抑えるために、チベット族居住地で、衛星放送の受信設備を大規模に撤去している。海外の衛星テレビ放送の視聴を遮断し、アンテナの販売も禁止され、

<sup>1</sup> 中国人民共和国国家統計局 <http://www.stats.gov.cn> 参照。

「不法業者」を通報した者には報奨金が支給されている<sup>2</sup>。

### 3. 調査の方法

2011年2月に、チベット族、またはウイグル族の身分証を有し、北京に在住しているチベット族8名と中央民族大学<sup>3</sup>のウイグル族在学学生8名を対象に、インタビュー調査を行った。そのうち、チベット族2名と、ウイグル族2名は北京出身であり、それ以外はそれぞれの自治区の出身である。また、チベット族には個別インタビュー、ウイグル族はグループインタビューを行った。加えて、チベット族の尼瑪さん(仮名、女性、51歳)とウイグル族の巴拉提さん(仮名、男性、21歳)を対象にして、2012年8月と2013年8月に、それぞれ2時間程度の個人のインタビューを行った。

本研究でアイデンティティ形成に関わる変数として用いたインタビューの調査項目は、言語の使用、宗教の信仰、民族意識である。次に、インターネットの利用に関する変数として用いたインタビューの調査項目は、よく利用するインターネットサイト、インターネットの利用目的、インターネット利用による自民族ネットワーク形成についてである。最後に、インターネット上の世論形成についても尋ねた。具体的な調査項目は以下の通りである。

アイデンティティ形成にかかわる変数として用いた調査の項目①宗教を信仰するのか。②日常生活の中でどの言語をよく使用するのか。③自民族の特徴。④民族意識が強く意識される場面。⑤「中国人」意識と「自民族意識」どちらを優先するか。⑥個々人が抱くアイデンティティを支えるのは何か。

インターネットの利用に関する変数として用いたインタビュー調査の項目①よく利用するインターネットサイト。②自治区で起こった事件についてどう思うのか。③海外の自民族団体の民族活動についてどう思うのか。

このような調査項目を分析することによって、北京在住のチベット族とウイグル族のインターネット利用とアイデンティティ形成の関係を考察することが可能になるだろう。

### 4. 調査結果と分析

#### (1) チベット族とウイグル族の自民族意識の高さ

チベット族対象者の調査を見ると、その多くはチベット仏教を信仰していた<sup>4</sup>。日常生活中によく使用する言語について尋ねると、8名のうち、2名(チベット族Eさん、男、21歳とチベット族Fさん、男、21歳)は、北京出身でチベット語より中国語能力が高く、家族との会話の多くは中国語を使用し、その他6名は、中国語とチベット語の能力が同程度であった。自治区出身者は自治区ではチベット語を使うと述べていた。チベット族の特徴は、「全民信教」という言葉からわかるように、全国のチベット族がチベット仏教を信仰すること(尼瑪さん、仮名、51歳)が挙げられる。

また、独自の長い文化を持っているチベット語(チベット族Hさん、男、53歳)や自治区地域に寺院が多いのも特徴の一つであり、国内、国外のチベット教信仰者が年中絶えずチベット自治区に訪ねてくるという(チベット族Aさん、男、21歳)。チベット族は、チベット族・チベット人としての二重意識(中国のチベット族と主にブータンチベット人との同一民族意識)を抱いており、中国少数民族であることは認めるが、中国人(漢民族と等置)としての意識はあまりなく(チベット族Hさん、作家、53歳)、「中国人」意識より「自民族意識」が優先されるという(チベット族Bさん、女、21歳)。

ウイグル族の場合、全対象者はイスラム教信仰者であった。親がイスラム教を信仰者なので自然とイスラム教を信仰者になって(ウイグル族Aさん)、小学校時から、宗教学校(私塾)でイスラム教を学んでいたという(ウイグル族Dさん、女性、21歳)。ウイグル族の場合はチベット族と異なり、日常生活においてウイグル語をよく利用

<sup>2</sup>大紀元日本1月11日。http://www.epochtimes.jp

<sup>3</sup>中央民族大学は、国家重点大学の一つであり、各少数民族のエリート養成のための学校である。現在のところ、中央民族大学では、チベット言語文化科、ウイグル言語文化科、モンゴル言語文化科、カサハ言語文化科、朝鮮族言語文化科など設置されている。http://www.muc.edu.cn。

<sup>4</sup>8名中7名がチベット仏教を信仰しており、1名がボン教(苯教)を信仰していた。唯一のボン教(苯教)信仰者である尼瑪(仮名、放送人、51歳)によると、「ボン教徒はチベット仏教徒より少ないが、二つの宗教は根を同じとし、摩擦はない」という。

していた。その理由を「大学の授業の時、食堂(ウイグル族専用)で食事をする時など、大学校ではウイグル語を使うので、中国語を話す必要がない」としていた(ウイグル族Fさん、男性、21歳)。

また、ウイグル族も自民族の特徴として信仰生活を挙げ、「ウイグル民族の象徴は何よりもモスクだ」としていた(ウイグル族Dさん、女、21歳)。インタビュー調査から、ウイグル族もチベット族と同様に宇民族意識が高かったことが明らかになった。巴拉提さん(仮名)は、「我々ウイグル族は漢族を中国人で呼ぶ、ウイグル族は中国人ではない、中華民族の概念と中国人概念は違う」(ウイグル族、男、21歳)といい、「民族アイデンティティを支えているのは、我々の集団意識である」など(ウイグル族Eさん、男、21歳)、「我々ウイグル族」という言葉がインタビュー内でよく使われていた。チベット族は、世界のチベット族との同一民族という意識が高かったが、ウイグル族は、世界のウイグル族との同一民族意識は低く、むしろ国内のウイグル族との関係を重視する傾向がみられた。

## (2) インターネットの利用実態

チベット族を対象に、インターネット利用について尋ねたところ、8名全員が日常的に、インターネット電話、インターネットテレビ、メールなど、インターネット(毎日6~8時間)をテレビ(毎日2,3時間)より利用することがわかった。よく利用するサイトとして、「中国藏族音乐网」<sup>5</sup>、「中国藏族网」<sup>6</sup>、「中国民族宗教网」<sup>7</sup>、「中国藏族网通」<sup>8</sup>が挙げられる。尼瑪さん(仮名)によれば、チベット自治区では、ブータンに関しては、衛星放送を通じて情報が流れてきている。チベット族世帯また寺院に大型アンテナを設置すれば、ブータンの衛星放送が利用できる。無論、海外の衛星放送の視聴は不法行為であるが、チベット族が衛星放送をよく利用することが分かった(尼瑪さん、仮名、放送人、51歳)。またチベット族は、自治区では海外衛星を、北京ではインターネットを利用して、ブータン(不丹)のニュースを中心に海外ニュースに接しているという。とくに、ブータン国王は、中国国内のチベット仏教徒の中で人気があり、若者たちは中国サイト「土豆网」<sup>9</sup>で、ブータンのドラマ番組をよく視聴するという(チベット族Hさん、作家、53歳)。

一方、ウイグル族大学生も他のメディア利用と比べ、圧倒的にインターネット利用が多かった。また、SNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)も日常的に利用していることが明らかになった。ウイグル族がよく利用するサイトは、ウイグル自治区のニュースサイト「天山网」<sup>10</sup>であった。ウイグル族自治区出身者の大部分は自治区にいる家族や友人と毎日連絡を取る目的でインターネットを利用して(ウイグル族Aさん、女、21歳)。しかし、ウイグル族はチベット族とは異なり、国外にいるウイグル族の活動家などの情報を入手することに対しては消極的であった。

によると

## (3) 国外の自民族運動家に対する国内ウイグル族、チベット族の評価とインターネット利用

ウイグル族は、海外ウイグル族に関する情報を積極的に入手しようとしなないものの、多数のウイグル族対象者の回答によって、ウイグル族は中国メディアに不満を抱いていることがわかった<sup>11</sup>。しかし巴拉提さんによると、

<sup>5</sup>中国藏族音乐网 <http://www.25xz.com>

<sup>6</sup>中国藏族网 <http://cn.bodrigs.com>

<sup>7</sup>中国民族宗教网 <http://www.mzb.com.cn>

<sup>8</sup>中国藏族网通 <http://www.tibet3.com>

<sup>9</sup>土豆网 <http://www.tudou.com/>

<sup>10</sup>天山网 <http://www.ts.cn>

<sup>11</sup> 例えば巴拉提さん(仮名)のインタビューは以下のように中国メディアを批判していた。

「ウイグル自治区の状況は、国内外のインターネットで語られるほど悪くない。ウルムチ市はチベットのラサと異なり多くの漢族が住んでいる。ウイグル族、漢族など民族を問わず、人が住んでいる場所にトラブルが起きるのは普通だと思う。しかし、なぜメディアはウイグル族と中国人とのトラブルだけを問題にして、大げさに報道するのだろうか。納得できない。……国内メディアは国内ウイグル族と海外の民族運動家(ラビア・カーディル世界ウイグル会議会長)の活動と関連して記事を書いているが、ネットで書かれたウイグル民族に関する記事は、事実と異なる時が多い。ウイグル族と漢族との間の民族紛争事件から、ウイグル族を「テロリスト」言い、ウイグル族が礼拝のために集まると「分裂活動」をするなど勝手にニュースが出てく

「実はウイグル族はネットで海外の記事を読まない」という。「ウルムチ市には中国他都市と同様にインターネットカフェ(网吧)が多い。漢民族と他民族は普通にネットを利用すると思うが、ウイグル族が問題になる海外の記事は検索しない」と述べていた(ウイグル族巴拉提さん、仮名、21歳)。海外の記事に接触しないという点は、他のインタビュー対象者も同様であった。例えば、「海外の民族運動家のネット上の発言は、我々ウイグル族の考えとは違う。ラビア・カーディルは政治指導者だが、彼女の発言は、国内ウイグル族にとって迷惑だ」(ウイグル族Gさん、女、21歳)、「我々学生は勉強をすべき、民族運動は民族運動家がやるべきだ」(ウイグル族Dさん、女性、21歳)など、批判の声が多かった。

他方、チベット族はウイグル族と比べ、自民族の海外の民族運動家の活動について、批判の声もあったが、ある程度希望を持っていることが分かった。こうした意見が最も現れているインタビュー(尼瑪さん、Hさん)を以下に要約した。

「何よりもチベット自治区のチベット族は、まだ軍隊(人民解放軍)の監視下で生活をするので、いつも不安感を感じがする……海外のチベット民族団体はとくにネットを利用して、国内のチベット仏教信仰者を政治活動に利用しようとするが、それはよくないと思う。……中国のチベット族の多くは独立を望まない。中国にもブータンのように信教の自由が保障される日は来るでしょう」(尼瑪さん、仮名、放送人、女、51歳)

「彼ら(ダライ・ラマ<sup>12</sup>)の活動を通して、中国政府は国際世論から注目を浴びることで、国内のチベット族の生活環境を変化させるだろう」(チベット族Hさん、作家、男性、53歳)

このように、チベット族は海外の民族活動家に対してウイグル族とは異なり一定程度評価していたこともあり、海外のチベット族に関する情報をインターネットや衛星放送を通じて積極的に入手しようとする姿勢がみられた。

また、チベット出身である5人はチベット自治区で発生した事件を直接経験したこともあり、自治区の問題についての回答は拒否された。

## 5. おわりに

結果として、まずは、「中国人」意識と「自民族意識」については、チベット族・ウイグル族のどのインタビュー対象者も「中国人」意識より自民族意識(アイデンティティ)が強いことが分かった。とくに、ウイグル族は、民族(集団)意識が強く、「我々」ウイグル族と「彼ら」漢民族との間に境界線を引く傾向が見られた。チベット族も同様に自民族意識は高かった。しかしながらウイグル族とは異なる「自民族意識」を有していた。ウイグル族は中国のウイグル族を自民族と認識しており、ウイグル人への帰属意識はなかった。一方、チベット族は、国外のチベット人を含めて自民族意識が強く、彼らは国内のチベット族と国外のチベット人、いずれも自民族と見なしていた。

次に、メディア利用に関しては、チベット族やウイグル族は、伝統メディアよりインターネットの利用頻度が高く、ネットを通じて主に自治区にいる家族や友人とのコミュニケーションを行っていることが明らかになった。チベット族の回答者の中には、今の自治区生活を変えることを望んでいる同時に、隣国(ブータン)への憧れを抱いていた。また、チベット自治区では海外の衛星放送やネットを利用して海外のニュースに接触していることが明らかになった。他方、ウイグル族はインターネットを利用して海外ニュースに接していないことがわかった。

最後に、今回の調査にみると、インターネットの利用と海外の衛星放送の利用は、チベット族の自民族意識の強さと関連していると考えられる。また、ウイグル族の場合、出身の新疆ウイグル自治区から離れ、中央民族大学という環境(他民族との共同生活)で、「我々」ウイグル族意識を支えるものとしてインターネットを利用していることが明らかになった。とはいえ、ウイグル族のアイデンティティとインターネットの利用との間に直接

---

る。」

<sup>12</sup>チベット亡命政府元首ダライ・ラマ法王(1989年ノーベル賞を受賞)は在外民族活動を行う。

の関連があると言い難い。以上のことから、北京在住のチベット族とウイグル族の人々は、それぞれ抱く民族的アイデンティティ、宗教などに応じて異なる社会的ネットワークを持つこと、そしてインターネットの活用の仕方も異なることがわかった。

#### 参考文献

- 1) 国分良成(2011)『中国は、いま』岩波新書。
- 2) 費孝通(1999)『中华民族多元一体格局』中央民族大学出版社。
- 3) Lilleker, D. G. (2006) *Key Concepts in Political Communication*, Sage. (『政治コミュニケーションを理解するために52章』, 谷藤悦氏監訳, 早稲田大学出版部, 2011)。
- 4) 山腰修三(2012)『コミュニケーションの政治社会学』ミネルヴァ書房。
- 5) 陳燁(2011)『転型と発展：民族問題と政治穩定』中央民族大学出版。
- 6) 胡泳(2008)『众声喧哗』广西师范大学出版社。
- 7) 任紅(2010)「维吾尔族青年宗教信仰现状调查与分析」新疆社科论坛(5)。
- 8) 王亜南, 鄭凡, 鄭曉云(2011)『中華統一国民共同体論』中国社会科学出版社。
- 9) 張淑娟(2011)『民族主義与中国民族理論』光明日報出版社。